

自閉症状を示した障害児の学校適応に 関する追跡研究 Ⅲ (3)

— 自閉症状の消失した障害児について —

伊藤 健次・近藤 明子・雨宮 政
竹花 正剛・加藤 哲文・久保田米蔵*
松田 玲子**・池 弘子・小林 重雄

I 目 的

本研究は、インテーク時には対人関係障害を中心とした自閉症状が認められたが、訓練を進めるにしたがって自閉症状が改善・消失し、主に知的発達遅滞を問題とするに至った5名の児童の追跡研究(近藤ら, 1979; 竹花ら, 1980)をさらに継続研究したものである。

現在5名中3名は普通学級に、2名は特殊学級に在籍し指導を受けているが、本報告では、チェッ

クリスト、担任との面談および授業参観によって現在の状況を把握し、就学前との比較考察をすることによって、各児童の就学学級が適切であったかどうかを検討・考察することを目的とする。

II 方 法

1. 対象児童(昭和55年9月現在)

対象児童は、表1に示す通りである。

表 1 症 例

対象児	性別	生年月日(年齢)	主 訴	インテーク	在籍学級	入 級 理 由
T. M.	男	S. 46. 12. (8: 09)	・ことばの遅れ ・落ち着きがない	S. 51. 9.	普通学級	・親の希望及び地域に特殊学級がないために入級。
K. Y.	男	S. 46. 9. (9: 00)	・幼稚園に行って仲間に入れない ・落ち着きがない ・言葉が少ない	S. 51. 4.	普通学級	・訓練に伴い問題が改善されてきたため普通学級に入級。
M. S.	男	S. 47. 3. (8: 06)	・ことばの遅れ ・対人関係の障害	S. 52. 5.	普通学級 (週2時間情緒障害児学級通級)	・本児の住む地域に特殊学級がないため市内の情緒学級併設の小学校に入級。
M. N.	女	S. 46. 8. (9: 01)	・ことばが殆んどない ・落ち着きがない ・つま先立ちで歩く	S. 50. 6.	特殊学級	・親の希望により入級。
H. T.	男	S. 46. 8. (9: 01)	・ことばが出ない ・落ち着きがない	S. 52. 4.	特殊学級	・ことばが出ないため普通学級での適応が困難と考えられたために入級。

脚注) * 研究生: 埼玉県立越谷養護学校 ** 研究生: 鹿児島県立串木野養護学校

2. 調査方法

5種類のチェックリストによる追跡調査を行う。チェックリストは母親の記入によるT-CLAC、行動変容、言語発達および学級担任の記入による学校適応、学習適応である。また、原則として、学校訪問（担任との面談、授業参観）によって得られる資料にも基づいて検討を加えていく。

Ⅲ 症 例

＜症例1＞ T. M児，男児，昭和46年12月生。8歳9ヶ月（昭和55年9月現在）。普通学級在籍（小学3年生）。

1. 訓練経過

（1）昭和51年9月～昭和52年4月。個人セッション，母子分離，学習態度の確立をめざす訓練が行われた。

（2）昭和52年4月～昭和53年2月。個人セッションと集団セッション，言語訓練が就学準備のための訓練として集中的に行われた。

2. 訓練終了時（昭和53年2月）の状態

訓練セッション中，本児は着席して課題に取り組むことができるが，飽きたり要求が通らないとひとり言が多くなり，時々泣き出すことがあった。課題面では，ひらがな，数字を読むことができ，概念的課題が遂行できた。

＜症例2＞ K. Y児，男児，昭和46年9月生。9歳0ヶ月（昭和55年9月現在）。普通学級在籍（小学3年生）。

1. 訓練経過

昭和51年6月～昭和53年3月。学習態度の確立から訓練をはじめ，①書く能力，②絵画能力，③話す能力，④数概念，⑤読む能力などの学習，そして⑥普通学級就学を目標として小集団グループによる適応訓練などが行われた。

2. 訓練終了時（昭和53年3月）の状態

行動面，言語面などがかなり改善され，課題学習中は席に座って作業ができるようになり，他の人とかかなりスムーズに会話ができるようになった。

＜症例3＞ M. S児，男児，昭和47年3月生。8歳6ヶ月（昭和55年9月現在）。普通学級在籍（週2時間，情緒障害児学級通級，小学3年生）。

1. 訓練経過

昭和52年5月～昭和53年3月。文字学習，ことばの学習，文の構成などを中心とした個人セッションが行われた。

2. 訓練終了時（昭和53年3月）の状態

正誤に対するこだわりが残り，助詞の欠落，疑問詞がわからないという状況であった。

＜症例4＞ M. N児，昭和46年8月生。9歳1ヶ月（昭和55年9月現在）。特殊学級在籍（小学3年生）。

1. 訓練経過

昭和50年6月～昭和53年3月。着席，注視訓練から始められ，形および大小の弁別，文字による絵カード弁別，トレーシング課題が行われた。

2. 訓練終了時（昭和53年3月）の状態

着席して1対1の学習形態で指示に従うことができた。色・形の弁別，音色と文字による絵カード弁別が可能となった。特に，本児は，視覚的記憶に良好な反応を示した。トレーシング課題には，注意を集中して取り組み，曲線や交叉も可能となった。

＜症例5＞ H. T児，昭和46年8月生。9歳1ヶ月（昭和55年9月現在）。特殊学級在籍（小学3年生）。

1. 訓練経過

昭和52年4月～昭和53年2月。個人セッションで学習態度の確立をめざし基本的課題が進められた。発語訓練を主な目的としながら，数積木などによる数概念や文字の練習など基礎的学習が進められた。

2. 訓練終了時（昭和53年3月）の状態

電車など乗り物に関心を示した。また，積木を好み，同色の積木を並べることに熱中した（構成的な特徴は見られない）。家庭，幼稚園では落ち着きがなく，集団生活から離れて行くことがしばしば見られた。1人で近くの公園へ行き，自転車，ブランコに乗って遊ぶことが多かった。母親が促さないと遊びに行こうとしなかった。フラフラと遊びに行くが，すぐ家にもどってくるという状態であった。

IV 結果と考察

1. チェックリストからの結果と考察

1) T-CLAC

図1-Aから図1-Eに示す通りである。

2) 言語発達チェックリスト

(1) 普通学級在籍児

図2-Aに示す。全員、「話す」「書く」「読む」という項目については上限に達している。しかし、

これらの項目は小学1年生時点で達成されていなければならないものであり、普通学級に在籍し、他児とともに行動していくためには不可欠の言語能力であると考えられる。

また、「聞く」という項目については、K. Y児とM. S児は集団場面で全体へのことばの指示に従うことができるようになっているが、T. M児は個人的に与えられた指示でないに従うことができない。

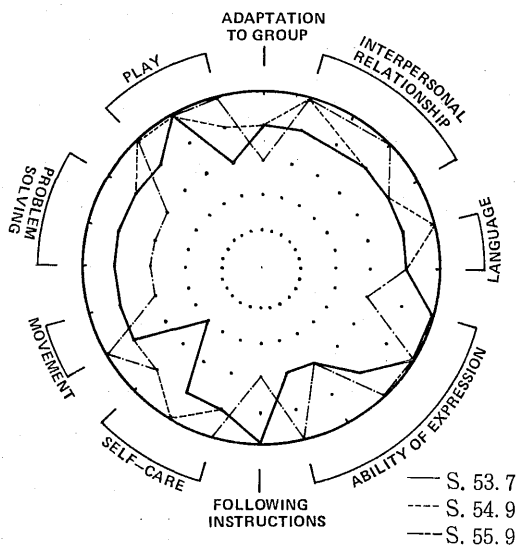


図 1 - A

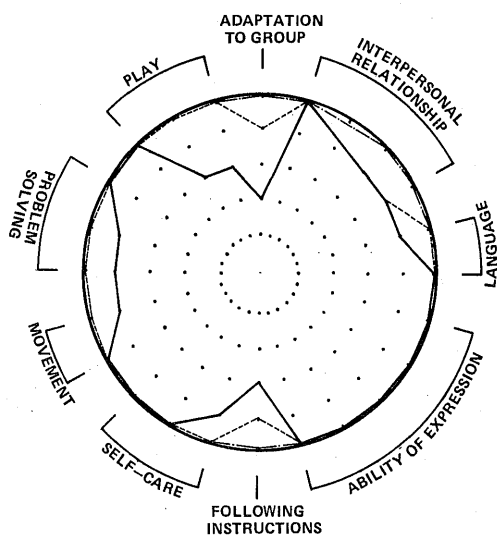


図 1 - C

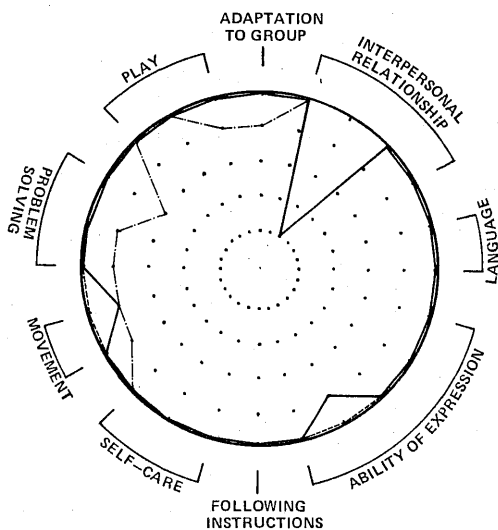


図 1 - B

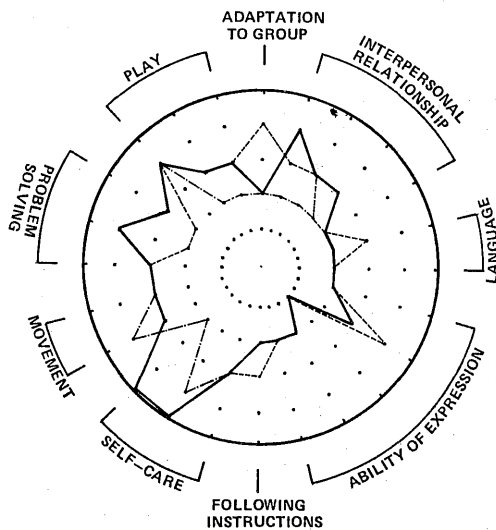


図 1 - D

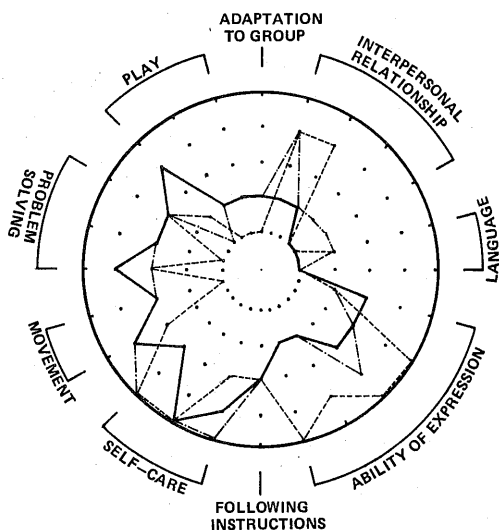


図 1 - E

状況にある。

(2) 特殊学級在籍児

図 2 - B に示す。H. T 児では「聞く」「書く」

M. N 児では「聞く」に改善がみられた。しかも両児は、現在、以前に比べ良好な学級集団適応を示している。このことから、良好な指示の理解力は集団適応への 1 つの条件であることが示唆される。

「話す」「書く」「読む」という項目については、M. N 児は変化が認められていない。単語の数は増加しているが、チェックリストにその変化が現われないためであると考えられる。一方、H. T 児は視覚系の改善が認められ、絵カードを見て、その名称をひらがなで書くということができるようになってきている状況にある。

(3) 行動変容チェック・リスト

1) 普通学級在籍児

図 3 - A, B および表 - 2 に示す。他者との遊び方、社会的対人関係ともに、肉親の大人とのかわり方がほぼ上限に達している。しかしながら、小学校 3 年生ということを考え合わせた場合、集団の質も高まっており、友達、他の大人との関係の改善がさらに望まれる。特に、T. M 児に関して、他者からの働きかけに対して自発性が乏しく、

		評 定	該 当 項 目
話 す	S53. 3.	1 2 3 4 5 6 7	7. 身近な出来事について話すことができる。
	S54. 9.		
	S55. 9.		
聞 く	S53. 3.	1 2 3 4 5 6 7 8	8. 全体への指示に応じられる。 7. 本人への指示に応じられる。
	S54. 9.		
	S55. 9.		
書 く	S53. 3.	1 2 3 4 5 6	6. 特別表記がかける。
	S54. 9.		
	S55. 9.		
読 む	S53. 3.	1 2 3 4 5	5. ひらがなを続けて読む。
	S54. 9.		
	S55. 9.		

図 2 - A 普通学級在籍児の言語発達

●——● T. M
△-----△ K. Y
×-----× M. S

	評 定	該 当 項 目
	1 2 3 4 5 6 7	
話 す	S 53. 3. S 54. 9. S 55. 9.	2. 本人の要求に応じた音声を発する。 3. 時々、場面に応じた単語を発する。 4. 時々場面に応じて二語文以上が使える。
聞 く	S 53. 3. S 54. 9. S 55. 9.	7. 本人のみに向けられた指示に従える。
書 く	S 53. 3. S 54. 9. S 55. 9.	1. 書いても文字にならない。 4. ひらがなはだいたい書ける。
読 む	S 53. 3. S 54. 9. S 55. 9.	1. 文字が全然わからない。 2. 特定の文字に偏った興味や固執を示す。 4. ひらがなをひろい読みする。

図 2 - B 特殊学級在籍児の言語発達

○—○ M. N
□-----□ H. T

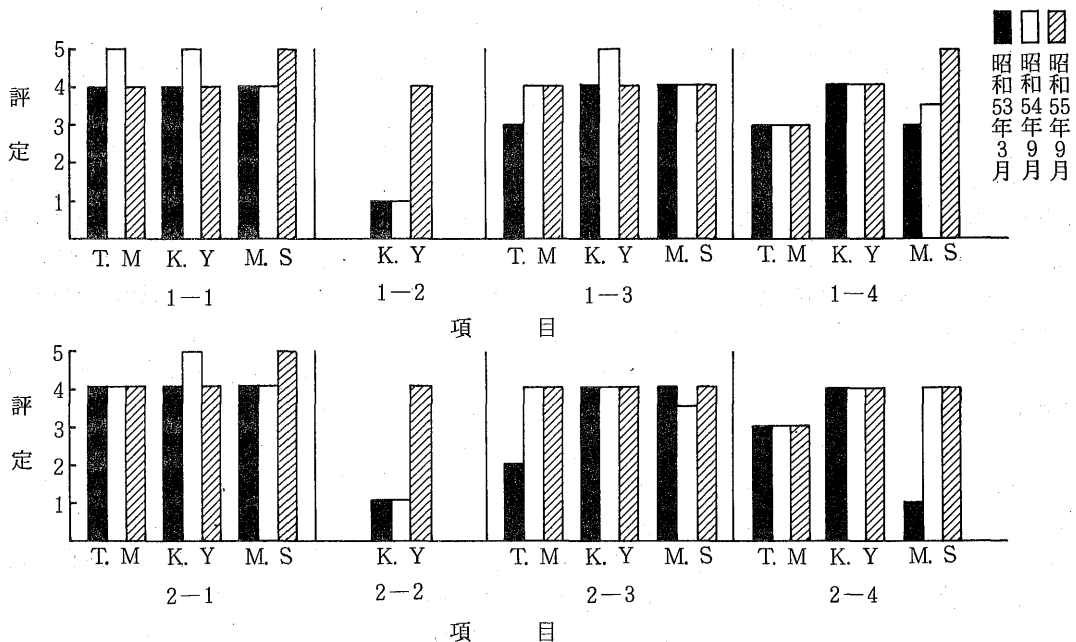


図 3 - A 普通学級在籍児の行動変容 — 他者との遊び方 —

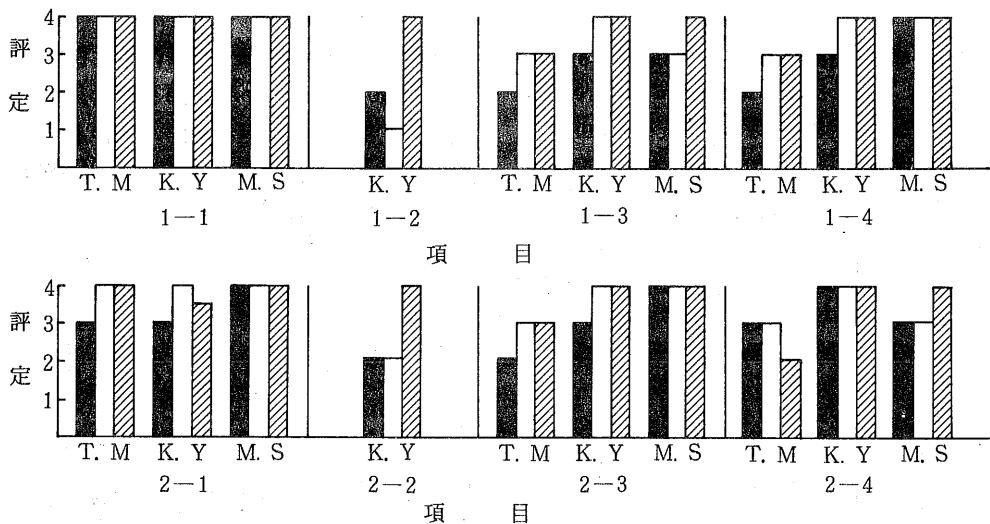


図3-B 普通学級在籍児の行動変容 — 社会的対人関係 —

表2 行動変容チェックリスト項目

項目	他者との遊び方	社会的対人関係
1-1	肉親の大人からの働きかけに対し	肉親の大人からの働きかけに対し
1-2	兄弟からの働きかけに対し	兄弟からの働きかけに対し
1-3	同年輩からの働きかけに対し	同年輩からの働きかけに対し
1-4	他人の大人からの働きかけに対し	他人の大人からの働きかけに対し
2-1	肉親の大人に対する働きかけ	肉親の大人への働きかけについて
2-2	兄弟に対する働きかけ	兄弟への働きかけについて
2-3	同年輩に対する働きかけ	同年輩への働きかけについて
2-4	他人の大人に対する働きかけ	他人の大人への働きかけについて

本児への指導のポイントでもある。K. Y児に関しては入級時に比べて兄弟関係に進歩を示している。

全体的に、集団への参加と適応面での遅れが予想される。今後、対象児の学級集団でのルールに従った遊びや活動に対する自発的なかわりが大いに望まれる。

2) 特殊学級在籍児

図3-C, Dおよび表-2に示す。他者との遊び方に関して、M. N児は、入級時の段階維持又は落ち込みが認められる。H. T児は、本児への働きかけに対しては、2年生時に比べて落ち込みが見られるものの、現在、本児のペースに合わせてもらえば応じられるようになってきている。両児とも、遊びへの参加や他児への働きかけの遅れが

指摘できる。

社会的対人関係に関しても、図からは大きな進歩は認められない。M. N児は両親との関係に進歩がみられる。一方、H. T児は、兄弟・大人への働きかけに落ち込みが認められる。

全体的に両児とも、周囲からの働きかけに対しては大体応じられるようになってきている。両児とも言語面での遅れが顕著なために要求の伝達、積極的なかわりに支障をきたし、遊び、対人関係に影響を与える一因にもなっていると考えられる。今後、行動面の改善とともに、言語面の改善が望まれる。

4) 学校適応チェックリスト

図4-A, Bは、昭和53年4月、54年9月、55

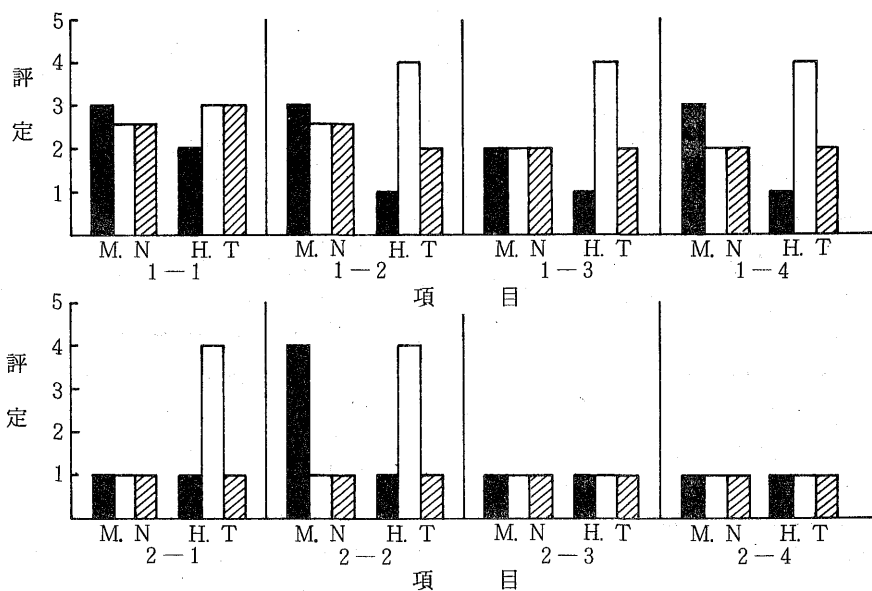


図3—C 特殊学級在籍児の行動変容 — 他者との遊び方—

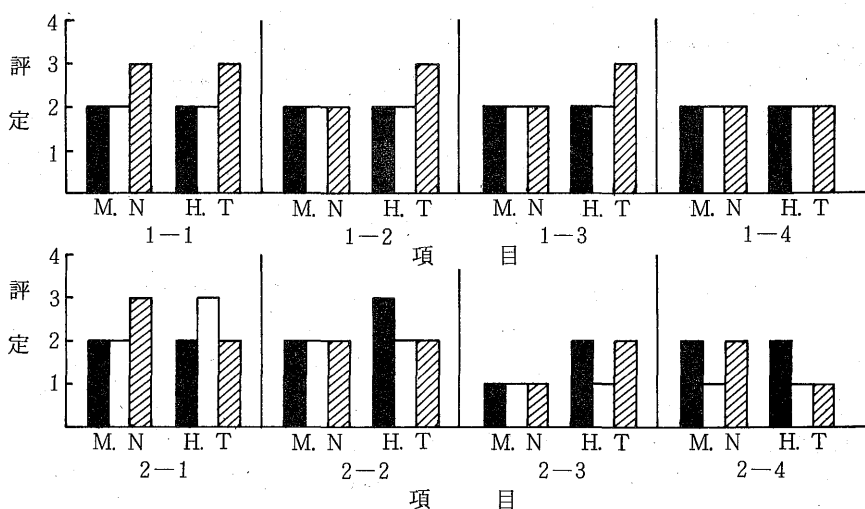


図3—D 特殊学級在籍児の行動変容 — 社会的対人関係—

年9月時における学校適応状況の評定である。基本的な生活習慣において、普通学級在籍児は、給食、排泄などはほぼ自立している。しかし、特殊学級在籍児は、H. T児がほぼ自立しているのに対して、M. N児にはまだ問題が残っている。生活習慣の指導は、家庭と学校において、一貫した方針で行われることが必要であり、その点、普通学級在

籍児は特に指導が効果的であったと言える。

授業中の適応状況をみるならば、特殊学級在籍児は、改善あるいは小学1年時と同程度の状態にあるのに対して、普通学級在籍児は授業・休み時間・授業の流れの項目で評価点の減少を示している。授業への適応は、普通学級在籍児において、現在最も重要な問題である。すなわち、小学1年

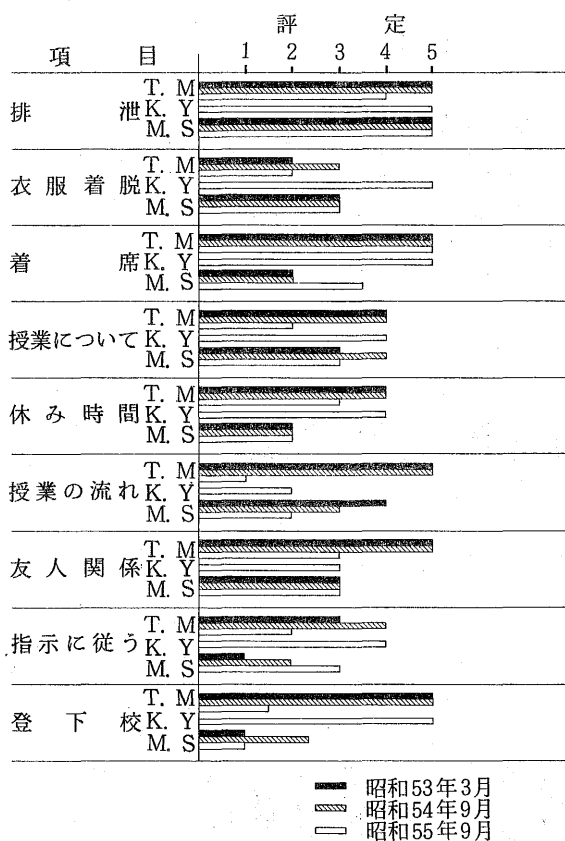


図4-A 普通学級在籍児の学校適応

時にはそれほど問題とならなかった学習上の適応が、他児と比べて遅れ始め、加えて休み時間、特別活動など、他児との交流の場において、問題が顕在化してきたためであると考えられる。また、M. S児のように、学習上はなんとか適応できても、集団場面の学習になると不適応な状況が目立つといった問題も出てきている。特殊学級や普通学級について、個々の学級に特色があり、一括して論ずることはできない。特に、普通学級在籍児の適応状況、個人の問題点を考慮の上、適切な対策を再検討する必要があると考えられる。

(5) 学習適応チェックリスト

1) 普通学級の在籍児について

T. M児

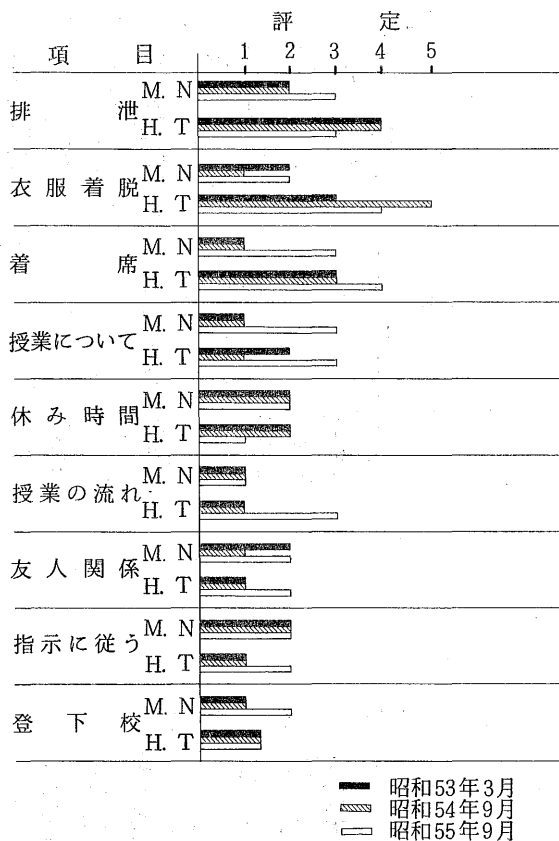


図4-B 特殊学級在籍児の学校適応

各領域とも進歩の程度は遅々としてはいるものの、伸びを認めることができる。特に数の理解、数の計算には著しい進歩がみられる。しかし、言語領域の「読む」においては訓練終了時から変化しておらず、停滞しているといえる。

Y. K児

母親が本児の幼児期の遅れや、かつて本研究室での訓練に通っていたことを担任に伝えていないことから、担任の記入による学習適応チェックリストによる調査は断念した。

M. S児

本児の学習適応状況は比較的良好であり、知的学習能力は他児と同等あるいはそれ以上の能力を持っているといえる。しかし、集団場面になると

その能力を発揮することができず、わずかながら突発的に無意味な音声を出すといった行動がみられる。

2) 特殊学級在籍児について

M. N児

言語、数、表現領域における進歩が認められる。しかし、社会、体育領域における進歩は認められず、前報(S.54年)と同じレベルに留まっている。

H. T児

全領域にわたって進歩しているといえるが、言語、特に表出能力が劣っている。したがって、数領域では数唱ができない、社会領域ではおじぎができて、「おはよう」「さようなら」が言えないなどの問題が認められる。しかし、視覚—運動回路の訓練によって、絵カードを見て文字で書いて答えるといったことが可能となってきている。

2. 現在の状況

(1) T. M児

言語面、特に話す、聞く、書くの3項目については一応の進歩を示しているといえるが読むについては訓練終了時と大きく変わる点は認められず、特に文章を読み、内容を理解することには一層の困難を示す状況にある。

言語発達チェックリストでは小学一年生時点で上限に達すること、本児は普通学級に在籍していることを考え合わせると決して良好な状況にあるとはいえない。また、本児は言語と行動の両者に共通する問題として、困難な課題解決場面、いやな場面等を避けるために、このような場面では急に多弁となり、無意味な単語を羅列し独語を発することが多く、今後検討される必要があるといえる。

学校適応については、個人的なことばによる指示にはなんとか従うことができるが、クラスあるいは大きな集団の中での全体的な指示には従うことができず、勝手な行動をとってしまうことが極めて多い。特に今年度に入り、担任が変わり指導方針、内容、方法等に変化があったこと、学級の中で他児が一段と規律正しい行動をとれる時期に達してきていることによって、相対的に一層逸脱した行動が目立ってしまうといった問題が生じてきており、普通学級の中で形式的にも適応してゆ

くために早急な対策が講じられるべきであるといえる。

学習上の適応状況では、前報と比較すると遅々としているが、各領域での進歩が認められる。しかし、学校適応同様、他児との比較においては極端な遅れを示してきており、現在大きな問題となってきた。

(2) K. T児

言語面では、要求、表現したいことをほぼことばで表わすことができる。表現の技術的側面において未熟さが顕著となっている。

学習面では一、二年時に比べ習得できない部分が多くなり、成績は学級内でも最下位である。しかし、学校生活の流れにはついてゆくことが可能であるという状況である。

本児の現在の問題は、学習面での遅れであり、今後、普通学級で適応してゆくためには積極的に援助しなくてはならないものと思われる。

(3) M. S児

言語発達チェックリストによる評定では、話す・聞く・書く・読むの各項目についてすべて上限に達している。すなわち普通学級において他児と接するための基礎的言語能力は獲得できたと考えられる。しかし、会話に不自然な単語が含まれたり、文脈がつかないこともあり、他児との間のコミュニケーションに支障をきたしていると考えられる。学習適応は、社会をはじめ、国語・算数に普通またはそれ以上の能力を示している。しかし、運動能力に遅れがみられ、特に器械運動、球技などの能力が低い状況にある。学級適応では前年より改善がみられるものの、学習能力と比べ著しく遅れている。学習態度では、授業中に自分勝手な発言をして授業を妨げたり、廊下を徘徊する行動が現在も持続している。また休み時間における他児とのかわりかは、ほとんどなく、一人で教室、廊下を徘徊していることが多い。時々他児の所有物をいたずらしたり、他児へ物を投げたりして、他児や教師の注意をひこうとする行動もみられる。全体的には、前報と同様、授業場面を中心とする集団での適応能力に遅れが目立っており、今後この問題点は本児の学習適応に大きく影響を及ぼすようになると考えられる。

(4) M. N児

言語面では、理解に伸びがみられる。以前は本児への個別的な指示が必要であったが、現在は集団の中でも指示を理解することが可能となっている。しかし表出面では、単語レベルにとどまっている。

学校での指導形態は3名の小集団、および学級全体の集団である。小集団は実質的には個別指導であり、個人のレベルに合った指導がなされている。本児は小集団において適切な学習指導を受けているため、数・言語両面に伸びがみられる。また、大集団においても、他児の行動を模倣したり、指示を理解することができるため、全体の流れについていくことが可能となってきている。細かい動作や長時間待たなくてはならない場面では担任教師の指示が必要であるが、パニックを起こすこともなくなり、集団参加の面で大きな伸びが認められた。

(5) H. T児

言語面に関して、時々意識的に模倣しようとするものの、発語量はあまり増大していない。一方、書字に関しては、かなりの進歩が認められ、絵カードをみて名前を書くことが、聞いて書くよりもかなり遂行度が高い。それ故、第1報(近藤ら、1978)で指摘された視覚—運動回路の学習・訓練の有効性が示唆される。

学校適応では、ことばによる指示に対しては、一応従えるようになってきた。担任に対する要求は場面に制約されるものの、その適切な行動の反応の頻度は高くなってきている。しかし、自発的な他児とのかかわりが少ないが、特定の児童に対して身体接触によるかかわりが認められる。学習面では、各教科とも入級時に比べ進歩は遅いものの着実な伸びを示している。特に、国語においては、書字能力の増大が顕著に認められる。又、体育においても、進歩がはっきり認められ、模倣行動の拡大と担任の指示に従えるようになったことが、その一因となっていると考えられる。

行動面に関して、学級での泣きの頻度が2年生時に比して少なくなってきており、机の上にとびあがる、口のまわりをなめる、洋服やハンカチをかむといった行動が減少し、また、注意すればや

めるようになってきている。現在、自分から手を使うこと(マットに手をつくこと、手でもの进行操作したり、さわったりすること)を拒否する行動が新たな問題として生じてきている。

V 総合考察

本追跡研究で対象とした児童は、インテーク時には対人関係障害を中心とした自閉症状が認められたが、訓練を進めるにしたがって自閉症状が改善・消失し、知的発達遅滞や言語障害などを問題とするに至った児童である。

これらの児童は、普通学級に在籍する児童と特殊学級に在籍する児童に大別され、それぞれの対象児に対する指導方針、内容、方法等が異っているのが現状である。

しかし、ここでは便宜上、普通学級在籍児と特殊学級在籍児の二つに分けて、チェックリスト等から得られた資料に基づいて考察を進めてみる。

1. 普通学級在籍児童

まず初めに、前報(竹花ら、1980)および前々報(近藤ら、1979)で主な問題となった学習面と集団適応の問題について考察してみると、学習面では、対象児それぞれが、その内容、程度が異なるが伸びが認められる。しかし、T. M児およびK. Y児では、個人として見た場合には伸びは認められるものの、学級全体とか同年齢の子どもとの比較においては、学習上の遅れが目立っている。特に、T. M児の遅れは著しいものがあり、授業内容の流れには全くついてゆくことができず、とり残された状況にある。

また、T. M児およびM. S児では学習態度にも問題を示している。T. M児は授業内容に飽きたり、困難場面になると独語や奇声を発するようになっていし、M. S児も授業中奇声を発したり、他児にいたずらをするという行動が目立ってきている。特にM. S児では、授業内容の流れにはついていっていても、他児から変な子ども、いたずらをする子どもと見られ始めており、学習態度には早急に何らかの対策が講じられるべきであることを示している。

一方、集団適応では、排泄・給食等の基本的な生活習慣ではほぼ自立しているが、学校行事などに

においては、逸脱する行動をとることが多くなっている。また、学習態度で述べた点と重複するが、学級内での授業への適応の問題がT. M児、M. S児で深刻となっている。したがって、これらの諸問題に対処してゆくために普通学級での指導の他にも、情緒障害児学級やことばの教室などを積極的に利用して特別な訓練プログラムを用意し、常に万全の指導体制を確保しておく必要があることが示唆される。

その他のチェックリストでの状況を見てみると、言語発達チェックリストでは、普通学級在籍児は「話す」「書く」「読む」項目などですでに上限に達しており、それ以後の状況を把握することが困難となってきている。しかも、このチェックリストは小学校1年生で上限に達するよう構成されているし、現在、各対象児が小学3年生になっていることも考え合わせると早急にチェックリストを改訂する必要があるものと考えられる。

また、行動変容チェックリストでは、言語発達チェックリストと同様に、一部上限に達しており、今後の課題とされた。

2. 特殊学級在籍児童

学習適応面でのこれらの児童の特徴は、進歩の度合いは遅々としているものの一步一步着実に進歩しているようすがうかがわれる点である。M. N児では数領域に、H. T児では言語特に「書く」領域にそれぞれ伸びを示している。しかし、いずれの児童も特殊学級内では個別指導は受けておらず、この時間が特に設定されればさらに着実な進歩を示すことが期待できる。

学校適応面で、特にN. M児に身辺自立上の問題が残っているものの、授業参観などを通してみると、比較的自由な雰囲気の中でのびのび学校生活を送っている観が強い。

また、言語発達面では、比較的低いレベルではあるが、着実な進歩を示している。特にM. N児では単語の発語数が増加したり、T. H児は視覚—運動回路の改善によって絵カードをみてその名称を書くなどができるようになっているが、このチェックリストではこれらの改善点が把握できず、今後の検討材料となることが示唆される。

行動変容では、M. N児、H. T児ともに落ちこ

みが認められているが、今回の追跡研究では詳しい点まで明らかにすることができなかったので、以後の追跡研究の課題としたい。

3. 各対象児の就学学級の適否の検討

いままでに、各対象児の現在の状況と問題点が明らかにされたが、就学前の状況や経過との比較によって、現在の在籍する学級が適切であったかどうかを検討してみることにしたい。

普通学級在籍児童と特殊学級在籍児童を比較してみると、特殊学級在籍児童には、現在までのところ顕著な問題点は浮かび上がってこない。むしろ、普通学級在籍児童に問題点が多いといえる。

そこで、ここでは普通学級在籍児を中心に検討を加えてみたい。

T. M児は特に学習適応・学校適応に問題を多く示していた。本児の場合、就学前においては、普通学級入級の条件を満たしていたというよりは、学区域に特殊学級のある小学校がなかったことと母親の希望として普通学級を望んでいたことなどにより、やむを得ず普通学級に入級したという経緯がある。しかし、学級担任の受け入れが比較的良好だったこともあり、一年生、二年生と着実に進歩を示してきたといえる。三年生になり学級担任が変わったことに加えて、学級内での他の児童が種々の面に高い遂行度を示すようになって問題が一層顕在化してきたといえる。このことは、今回の担任の記入によるチェックリスト記入において全体が落ち込んでいることから推測できる。

これらのことから、就学学級は将来的な見通しを充分もった上で決定すべきであることが示唆される。

K. Y児は普通学級入級の時点で、幼児期に発達が遅れていたこと、当研究室に訓練に通っていたことなどを担任に話していない。したがって、今回も担任から得られる資料がないために母親から得られた資料にもとづいて検討を加えてみる。

本児は普通学級入級の時点では、兄弟関係を除くT—CLAC、言語発達は上限に達しており、その条件は満たしていたといえる。しかも、担任の受け入れも比較的良好であったこともあって、1年生時には良い適応状態を示していたといえる。ところが、2年生になって担任が変わり、本児が

学習意欲の増大を示したにもかかわらず、担任の指導方針との不調和がみられるようになってきている。又、この頃より、集団場面での行動の落ち込みが認められはじめてきている。

現在、本児は学習適応、学校適応等に落ち込みが目立ちはじめてきている。このことはT. M児同様、相対的に他児が高い遂行度を示すようになって顕在化してきたとも考えられるが、その他の要因として、担任の受け入れのいかんによっても影響されることがあることを示すものであろう。

M. S児は、普通学級入級の時点では、普通あるいはそれ以上の知的能力をもっていたといえる。このことは現在の良好な学習適応から見ても明らかである。しかし、本児の場合集団適応上の問題が顕著であり、現在も、本児においては大きな問題点となっている。この原因として、母親の養育態度が強く影響していると考えられ、母親が学校に介入する場面が比較的多いことから推測できる。また、本児の不適切な行動に対しても担任の

とまどいが認められ、十分な処置、指導がなされていないと考えられる。

本児は週2時間、情緒障害児学級に通級しており、母親指導や担任指導などにこの学級を積極的に利用してゆく必要性が示唆される。

参考文献

- (1) 近藤明子, 高杉紀久子, 伊藤健次, 竹花正剛, 井口裕子, 小林 明, 池 弘子, 小林重雄, 長畑正道, 斉藤義夫
: 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する研究Ⅰ(4) — 自閉症状の消失した障害児について —, 心身障害学研究
1979, 3, 121—134
- (2) 竹花正剛, 近藤明子, 井口裕子, 長 藤利, 古賀靖之, 柴 勝代, 高杉紀久子, 池 弘子, 小林重雄
: 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する研究Ⅱ(3) — 自閉症状の消失した障害児について —, 心身障害学研究
1980, 3, 63—81

注) 本研究は筑波大学人間学類3年中村知恭君の協力によって進められました。記して感謝いたします。

Summary

The Follow-up Studies concerning School Adjustment of Handicapped Children with Autistic Symptoms III (3)

— Handicapped Children whose Autistic Symptoms have Improved —

Kenji ITOH, Akiko KONDO, Masashi AMEMIYA, Seigo TAKEHANA,
Tetsubumi KATO, Yonezo KUBOTA, Reiko MATSUDA, Hiroko IKE, Shigeo KOBAYASHI

In the study, the 5 subjects were evaluated with the T-CLAC, the language developmental check-list (LDCL), the behavior modification check-list (BMCL), the school adjustment check-list (SACL), and the check-list for achievement of academic learning (CLAAL), as were reported before (Kondo et al., 1979; Takehana et al., 1980).

The subjects manifested some of so-called autistic symptoms at their intake period. Through modifying of their symptoms as a result of the training, their diagnosis given have been changed from "childhood autism" to normals, hyperkinetics or mental retardation.

In comparing the current data with those reported before, it would be discussed whether the contents of training and their placement have been adequate.

The cases are as followed;

Case T. M. (8ys. 9mos., male, regular class)

Intake: Retardation of speech, distractiveness.

Training period: Sep., 1976 – Feb., 1978.

Problems (Sep., 1980): Retardation of academic learning.

Case K. Y. (9ys., male, regular class)

Intake: Maladjustment in the kindergarten classroom, distractiveness, retardation of speech.

Training period: Jun., 1976 – Mar., 1978.

Problems (Sep., 1980): Retardation of academic learning.

Case M. S. (8ys. 6mos., male, regular class)

Intake: Retardation of speech, disturbance in inter-personal relationship.

Training period: May, 1977 – Mar., 1978.

Problems (Sep., 1980): Maladjustment in the classroom, weak frustration tolerance.

Case M. N. (9ys. 1mos., female, special class)

Intake: Retardation of speech, distractiveness.

Training period: Jun., 1975 – Mar., 1978.

Problems (Sep., 1980): Retardation of academic learning, retardation of speech.

Case T. H. (9ys.1mos., male, special class)

Intake: No spontaneous speech.

Training period: Apr., 1977 – Feb., 1978.

Problems (Sep., 1980): Problem of verbal utterances, maladjustment in the classroom, retardation of academic learning.

The results of follow-up study were discussed as follows;

(1) The children in the regular class (3 subjects)

3 subjects have shown gradual improvement in academic learning (CLAAL). Although case T. M. and case M. S. have shown some inadequate behaviors in the school situations (SACL). In the other check-lists, validity of evaluations have been decreased due to tendency of checking at the upper maximum, especially in LDCL. It should be suggested that these check-lists are in need of revision.

(2) The children in the special class (2 subjects)

2 subjects have shown slowness in achievement of academic learning (CLAAL). No individual training have been prepared at present. It should be recommended, therefore, to have individual training.

(3) The discussion of their placement

Almost no problem have been shown in special class children, but the children in the regular class have shown many problems. In this paper, we have discussed the children in the regular class. In case T. M., it would be advisable that appropriate class should be considered on sufficient prospect. In case K. Y., it seems that his improvement is due to his teacher's acceptances. In case M. S., it is suggested that the special program would be needed in addition to the regular program.